

子どもの問題にかかわる学際的な議論をファシリテートするハブとしての チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）の貢献

○ 劉 愛萍¹ 小川 淳子¹ 小泉和義² 黒木研史² 榊原洋一¹

（¹チャイルド・リサーチ・ネット、²ベネッセ教育総合研究所）

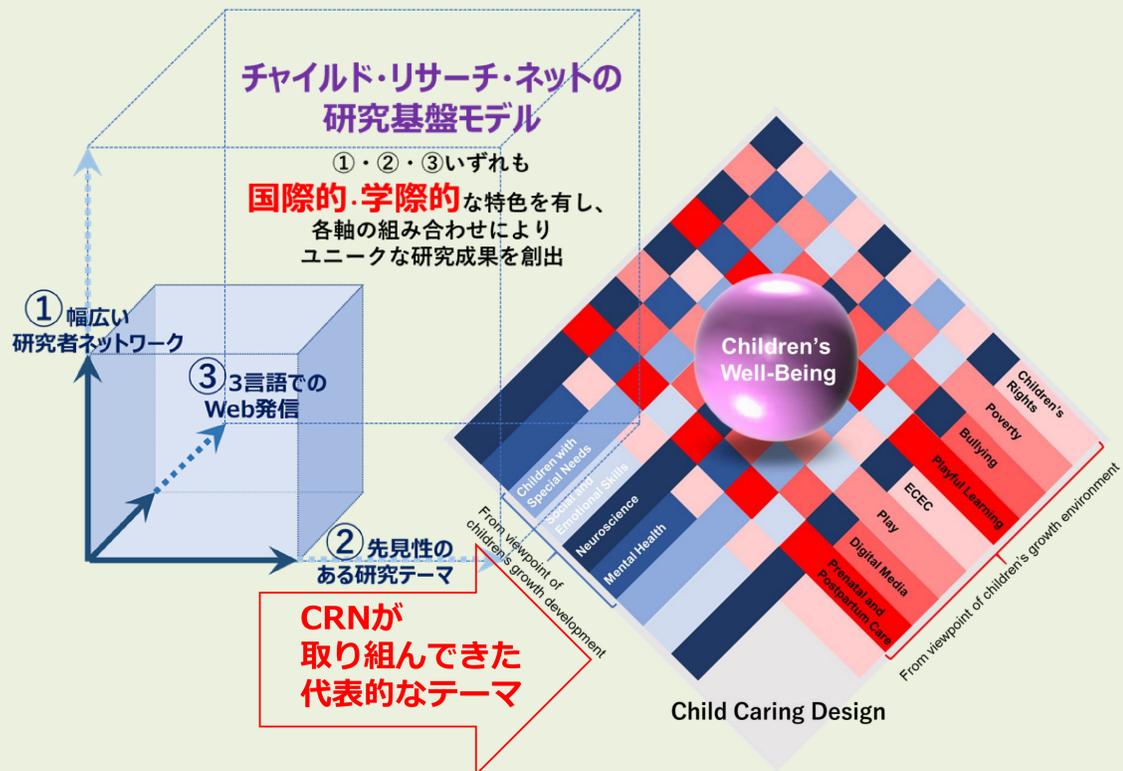


■チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）：子どもを取り巻く問題を解決するための糸口を探る研究所

未来の世界を支えてゆくのは子どもたちである。
「子どもは未来である」をスローガンに、子どもに関わるすべての人が、情報を交換、共有し、子どもに関する課題（Child Issues）について研究する場（Arena）として、1996年に設立されたチャイルド・リサーチ・ネットは、WEB上の学際的な「子ども学研究所」であり、多言語展開している。

<https://www.crn.or.jp/>（日本語版）
<https://www.childresearch.net/>（英語版）
<https://www.crn.net.cn/>（中国語版）

世界規模で医学、発達心理学、教育学、脳科学、社会学などのキーパーソンや研究機関とネットワークを構築し、子どもを取り巻く問題の解決に取り組んでいる。その成果をWEB上において、日英中三言語で広く発信すると同時に、研究会や国際シンポジウムの開催なども推進してきた。これまでに取り組んだテーマは、子どもの生物学的側面と社会的側面から、プレイフル・ラーニング、ECEC、デジタルメディア、遊び、発達障害、社会情動的スキル、脳科学、心のケア、産前産後のケア（ドゥーラ）、子どもの権利、いじめなど多岐にわたる。



本発表では、CRN全体のテーマの中からプレイフル・ラーニングとECECの活動にフォーカスして報告する。

■研究事例1：プレイフル・ラーニング

（本研究の目的）

子どもの成長発達において、社会情動的スキルが重要であり、アクティブ・ラーニングは有効だと言われている。CRNでは1999年に、心のプログラムと体のプログラムをフル稼働させて学ぶプレイフル・ラーニングに着目し、その研究と実験を行ってきた。

（方法）

遊びと学びに関わる世界の研究者、実践者、子どもと保護者を交えたワークショップを行うとともに、プレイフル・ラーニングが可能になる実験的な場所（永山にある小学校を基地に）を設置し、子どもたちの観察実験を行った。

（結果と考察）

プレイフル・ラーニングを実現するために必要な要件（環境）は以下のようなものであるとCRNが考える。

- ① **集団**：ゆるくつながる関係のメンバーによって構成された集団
- ② **道具**：コミュニケーションを促進するようなものを工夫する
- ③ **プログラム**：緩やかなタイムスケジュール
- ④ **ファシリテーター**：盛り上げ役の存在
- ⑤ **縁側的な環境**：気軽に入ってきやすい環境



★★総合プロデューサー：
上田 信行
(甲南女子大学教授/Ed.D.)



過去の活動に関わってくださった先生方の一部

- 大森美弥 (小児心理カウンセラー/Ed.D.)
- ヒレル・ワイントラウブ (同志社国際中学・高等学校教師)
- 宮田義郎 (中京大学教授/Ph.D.)
- リアン・ラムゼイ (同志社国際中学・高等学校教諭/デザイナー)
- エディス・アッカーマン (MITマサチューセッツ工科大学客員教授/Ph.D.)
- ジョギ・パンガール (デザインコンサルタント)
- ミルトン・チェン (ジョージルーカス教育財団エグゼクティブディレクター/Ph.D.)
- ルース・コックス (女優、教育者/Ph.D.)

■研究事例2：ECEC研究

（本研究の目的）

いま世界の保育・幼児教育において関心の高い課題は、「持続可能な幼児教育」「保育の質」そして「遊び」である。CRNは、2013年度からECEC (Early Childhood Education and Care) 研究に取り組み、保育者や保護者、研究者が一堂に会する議論の場として、ECEC研究会を5回開催し、以下のテーマについて最新の知見を検証するとともに、これらの課題を解決する方法を探求してきた。

- ① 世界の中における日本の保育・幼児教育の位置づけ
- ② 保育の質を測定する基準は何か
- ③ 保育の質を高めるために何が必要なのか

（方法）

これらの課題への解決法を探求するために、WEB上での情報交換だけでなく、研究者、保育者、保護者による研究会を行い、以下のテーマについて検討した。

- 第1回「日本の保育の課題と展望」
- 第2回「遊びと学びの子ども学～ Playful Pedagogy ～」
- 第3回「遊びの質を高める保育のあり方」
- 第4回「世界の保育と日本の保育①～遊びの中に学びを探る～」
- 第5回「世界の保育と日本の保育②～4カ国との比較から日本の保育の良さを探る～」

（結果と考察）

定性的な叙述による保育の質の評価には客観性が不十分であるという認識のもとに、世界の幼児教育研究者による代表的な保育実践を『ECEC活動報告書』としてまとめた。さらに、保育の質を俯瞰し、評価するためのツールとしてスプレッドシート状で比較解析を容易に行うことができる『各国・地域のECECマトリクス図』を開発した。



『ECEC研究報告書』 & 『各国・地域のECECマトリクス図』



＜ECEC研究会の様子＞
講演、シンポジウム、ワークショップなど、参加型の議論を展開してきた

■まとめ

子どもを取り巻く社会問題の解決には、各分野の研究者による学際的な研究、実践に結びつく解決策の提案、ワークショップなどを通じた、研究者、実践者、保護者の総合的な関わりが必要である。

CRNは22年間の様々な試みを通して、その議論や研究のプラットフォームを提供し、総合的な関わりができる環境を提供することに貢献してきた。これからも子どもに関心のあるすべての研究者、実践者が参加するCRNの活動をさらに広げ、子どもの課題解決に貢献していきたい。

